

はりこでの畜産の基軸は広い未利用林野を生かした草地畜産であろう。これは今日の我国をとりまく飼料問題、食糧自給問題などからみても、また国土の有効利用の面からみても非常に望ましいことと思われ、各地域に即した開発の遂行が望まれる。

## 居住環境評価における愛着意識

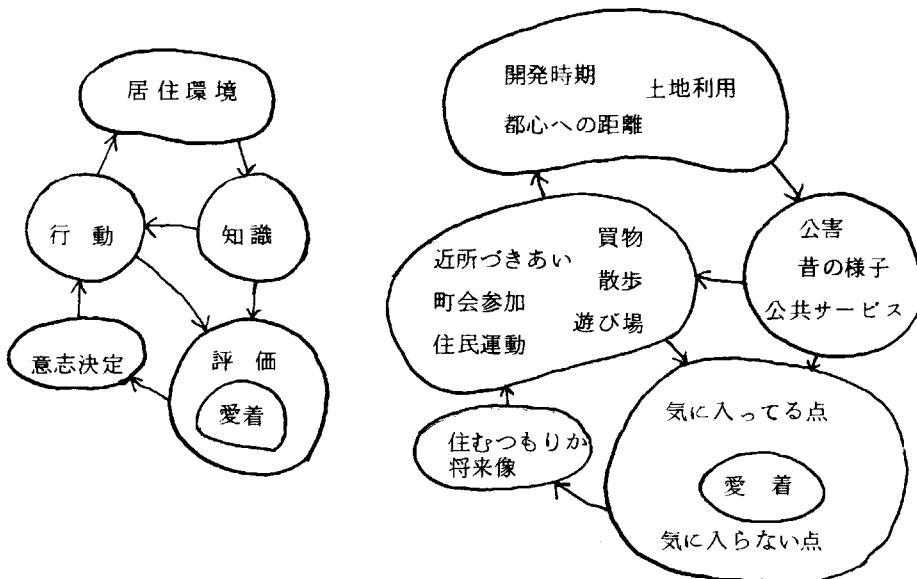
### I. 序

吉 田 晶 子

現代の都会の人々は、住んでいる町に対し、どのような思いを抱いているのであろうか。それは様々な感情の複雑にからまったものであるのだろうが、その中で“愛着”の意識とはどのようなものか、どのように育つのか、さらに、町づくり運動のようなインパクトに対してどのように働くのか。このような点を問題意識とし、東京の住宅地を例として研究を進めた。このテーマをとりあげたのはまた、東京が愛着のもてる町であって欲しいという素朴な気持からでもある。

### II. 研究の枠組

本論文では、愛着意識を人間—環境系の脈絡においてとらえていく。居住環境と人間の関係を考察してみると、人間は、環境を認知し、知識を得、行動を通して働きかけている。さらに、知識・行動から環境を評価するというかかわりを持っている。その居住環境評価のかなり深層に位置する意識の一つに、愛着を感じる意識があると考えられる。この関係を1図に示す。このような愛着意識の実態および形成過程を把握することにより、人間—環境のかかわりの方式の一面を解明することは、本研究



1 図

2 図

のねらいであるが、同時に、愛着の意識が環境への働きかけである行動に与える効果の面も考察していく。特に居住環境に直接働きかける町づくり意志に基く行動に注目する。

では、愛着意識をとりまくこれらの環境・知識・行動・評価はどのようなものであるかを概念枠組から考察し、愛着意識の形成過程の仮説として提示する。これを2図に示す。仮説に従って実態把握を行うため調査を実施した。調査はインタビュー調査を中心にし、後にアンケートによる大量調査を行なって分析を加えた。

### Ⅲ. 愛着意識の地域差

インタビュー調査より、地域によって異なった型の、愛着意識の類型が得られた。類型化は、愛着意識の形成要因および愛着の強さが異なっていることからなされる。類型化に影響する要因は、地域および個人属性の特性である。各調査地域で得られた愛着意識形成過程の類型を付す。

### Ⅳ. 愛着意識の構造分析

次にこれらの愛着意識の形成要因の作用形態を、アンケート調査の分析という角度から試みる。インタビュー調査により、愛着意識の類型と、それぞれの場合における形成要因の作用形態は確かめられているが、それに統計的裏づけを与えることにより、愛着意識の一般形の考察に向かうものである。分析はクロス集計、数量化Ⅱ類を試みた。

この結果言えることは、愛着意識の形成要因としては居住年数が非常に重要であるという事である。居住年数と関連があると思われる職業、学歴も重要性は高い。また、環境満足、近所づきあいの深さは予想に反してあまり重要性が高くない。これは、東京の環境変化の激しさを物語っているといえよう。愛着を形成するような環境・近所づきあいは、ごく局所的になっているのであらうと思われる。

また、町づくりの意識は愛着とはあまり結びつかないと言える。強いて言えば、町内という範囲での社会的行動に、愛着意識が影響することは示された。

### Ⅴ. 愛着意識の形成過程のモデル

仮説・調査・分析をふまえて、愛着意識の形成過程のモデル化を試みよう。まず形成要因をあげる。

- 1) 現在の環境への満足意識
- 2) 生活行動にとっての利便性
- 3) 生活行動にとっての快適性
- 4) 近隣対人関係
- 5) 居住地についての特徴意識
- 6) 過去の環境への懐古意識

この背景となっている要因は、

- 1) 地域特性
- 2) 個人属性、家の属性

である。次に、愛着の強さは、評価意識の局面から考察すると、次のような面がある。

- 1) 愛着を感じる感覚
- 2) 居住環境に対する全体評価
- 3) 居住環境に対する個別評価

それぞれの局面においてどのような評価を持つかにより、愛着の強さが異なるとする。

愛着意識の効果面についても、その側面をあげると次のような分類ができる。

- 1) 近隣協力意識
- 2) 地縁組織協力意識
- 3) 現在の環境への関心
- 4) 将来の環境への関心
- 5) 永住意志

ただし、このような町づくり意識と愛着の意識は結びつくということとはできない。その形成過程が別であるのである。

#### VI. まとめ

結論に変えてまとめれば、このような要因およびその作用形態をとって愛着意識は形成される。それは町づくり意志のような方向には強く結びつかず、むしろ愛着を持つとは、慣れ、なじみといったような、環境への適応としてとらえられ得ることであると思われる。

### お 知 ら せ

#### 1. 投稿規定

- お茶の水女子大学地理学科卒業生及び旧、現職員は本誌に投稿することができる。
- 用紙は横書き400字詰原稿用紙とする。
- 投稿の範囲・内容は特に規定しないが、研究論文・調査報告・近況報告などが望ましい。
- 論文・報告は15～20枚(図表1～2を含む)、短報は2～3枚程度とする。
- 投稿希望者は毎年9月末日までに題目と予定原稿枚数を下記宛申し出ること。

112 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学地理学教室内

お茶の水地理編集委員会

2. 住所・勤務先の変更、改姓の場合も上記宛御連絡下さい。
3. クラス会・同窓会などの様子もお知らせ下さい。